

ライトダウン

著..星添依帆

1 ライトダウン

平等を標語にするにしても限度があるというか、平等化の波が遂には人々の寿命にまで及んだ頃の話。

詮方ない言い方をするが、人間は生まれながらに寿命を授かる。それは五十年だったり八十年だったり、はたまた百年だったりと規矩がない。そして生まれ落ちたその瞬間から、寿命は時間という概念によって等しく目減りしていく。その流れに、誰も抗うことはできない。

もちろん、全員が全員与えられた寿命を全うできるわけじゃない。物語の途中で不慮の事故に遭うこともしばしばあることだ。

それは当たり前のことだ、と誰もが思うだろう。命というのはそういうふうに来ていて、生物が生物たる本質はそこにあつて、他のあらゆる生き物がそうしているように、その事実を享受して生きるべきだと。

しかしその時代に蔓延っていた、行き過ぎた平等主義者たちはそうではなかった。共産主義者も真つ青になるくらいにシンプな彼らは、口々に疑問を呈し始めたのだ。

どうして寿命の長さが初めから決められているのだろうか？ 五十年の寿命を持つ者は、百年の寿命を持つ者の倍だけ価値のある一分一秒を過ごせるのだろうか。

どうしてどんな生き方しても寿命は平等にすり減るのだろうか？ 溢れる活力を出し切った十年と、眠って過ごした十年は、果たして等価値だろうか。

そこに、平等はあるのだろうか。もしも無いというのなら、この世界の仕組みは根本から間

違っている。

やがて彼らは人里離れた未開の島に集まり、真なる平等を求めなるべく活動を始めた。

さて、これからするのは、寿命という概念が「一冊の分厚い本」に簡略化されたモノたちと、一人の少女に纏わる話だ。

遠く未来の、少しだけ過去のお話——。



あるところに島があった。

周囲を深い霧と靄が覆っており、外部との連絡は遮断されていた。人口は二人足らずで、島の中央を拓いて小さな町が息づいている。町から外れた島の南端には「議会」と呼ばれる施設があつて、間接的に町を統治していたが、その実態を知る者はあまりいない。

その島の民には一つの特徴があつた。彼らは皆、生まれながらに一冊の本を抱えるのだ。革製の立派な表紙に、膨大な数のページ。これが彼らの寿命だった。その本の持ち主に起きた出来事は余すことなく自動的に記され、すべてのページが文字に埋もれた時、本の持ち主はこの世を去ることになる。

その本がいつからあるのか、どうしてあるのかは誰にも分からない。疑問に思うことさえな

かった。外界と隔絶されたその島ではそれが当たり前で、それが常識だったから。

彼らにとつて、自分の寿命が可視化されているというその事実は、端的に言つて恐怖でしかなかった。日々すり減っていく己の寿命を突き付けられて、平然としていられる者はそういない。彼らは皆、必要以上に死を畏怖した。だからどうにかして、寿命を少しでも伸ばせないものだろうかと思もが考えた。

当事者でもなければ、本自体に仕込みをすることを考えるだろう。たとえば「ページを継ぎ足してみる」とか、あるいは「本を燃やしてしまうのはどうだろう」とか、そんな具合に。だが町民は誰一人としてそんなことをしようとは思わなかった。それはそうだ。自分の命と直結しているものを、下手に弄ろうとは思わない。

だから、町民たちは代わりにこう考えることにした。

「なるべく、ページの消費を減らしていこう」

それから彼らは必要な仕事をこなす時以外、日がな一日家に引きこもり、大人しくして過ごすようになった。

物語でいう「それから一週間が経過した」という一文で済まされてしまうような、そういう日々を送ることにしたのだ。特筆することもない、平凡で薄味な人生を。

もちろんそれは延命治療に過ぎず、真つ当に人生を全うすれば六十年で尽きる寿命が百年になるとかその程度なのだが、『数値』に異様に拘るのが如何にも人間らしい。充実した六十年よ

り、何もない百年を選んでしまうのだ。

「だって、人生が楽しいか否かっていうのは曖昧で確実じゃないけど、寿命という数値を増や
すっていうのは具体的且つ現実的だろう？」

人々は口を揃えてそう言った。寿命が可視化された世界の人間らしい言い分だった。

そんな時が停滞したような町の中、一人だけ生き急ぐ者がいた。

クラヤミという名のその男は、人一倍に行動的だった。午前中はその忙しさから誰もが敬遠
する施設整備の仕事を率先して引き受け、日が高く昇ると美味しいレストランで昼食を取った。
午後になるとミュージック・プレイヤーで古い音楽を聴きながら美術館や博物館を徘徊したり、
スポーツに勤しんだりした。図書館に足繁く通って、本を読み漁ったこともあった。路上で楽
器を演奏したり、レンジ・ファインダーで町の様子を写したりもした。とにかく彼は思い付く
限り、あらゆる娯楽に手を染めた。

町で彼は変人扱いだった。「そんなに寿命を浪費して、あの男は命が惜しくないのだろうか？」
しかしクラヤミは自身に対するどんな誹りも気にしたことはなかった。いつだって少数派は、
多数派による自己正統化の犠牲になるものだ。

そんなわけでクラヤミは二十六歳なのに、自身の本のページを九割方埋めていた。順当に考
えて、あと数年も生きられない。けれど、それでいいと彼は考えていた。長く生きても、楽し
くなければ意味がない。「濃く、短く」。それがクラヤミのモットーだった。

クラヤミは、誰よりも濃い自分の本を、何より誇りに思っていた。



クラヤミは暗いところが好きだった。名は人を表すというが、その通りだ。クラヤミは暗闇だから、暗いところがお気に入りなのだ。

行動派の人間が暗いところを好むということを、一種の矛盾のように感じる人もいるかもしれない。だが、人の趣向は必ずしも相反しないわけじゃない。

ロック・ミュージックを好む人間が、それと同じようにバラードを愛したとしても、それを咎めるものはいないだろう。人前では真面目に振る舞う好青年が家では酒と煙草に溺れていても、あるいは不良と呼ばれる少年が家では律儀に家事を手伝っていたとしても、それは矛盾ではない。人間というのは多面性を持っていて当然なのだ。画一的な人間など滅多にいない。それこそ、下手な物語の中でもなければ。

むしろ、日頃アクティブに動く彼だからこそ、暗がりでじっとしているような「静」の時間が必要だった。それは彼にとっていわば、充電期間のようなものだった。

彼は「人付き合い」「晴天」「喧騒」を好んでいたが、それと同じくらい「孤独」「暗闇」「静寂」も愛していた。

さて、クラヤミにとって不都合なことに、この町に暗所は皆無だった。どこもかしこも光に溢れているのだ。

この町を統治する数少ない法律のひとつに「照明法」という馬鹿げたものがあって、「空間は一定以上の明るさを確保されなければならず、また確保される権利がある」という趣旨の条文が掲げられていた。曰く、室内も屋外もすべて明るくなくてはならない。

そんな法案が成立してしまうことから推測できるように、この町の間は暗闇を甚く嫌悪していた。本の影響で常に死を意識せざるを得なかったこの町の人々にとって、暗闇は死を連想させる嫌なものだったのだ。

町の至るところに背の高い柱が置かれ、その天辺に取り付けられたサーチライトが町中を照らした。サーチライトの光は、大半の建物の室内にまで浸透した。分厚い光のベールは、町と空とを遮った。

そうして生まれたのが、昼夜を問わず光に溢れる町。いつしか住民はこの町のことを「ライトタウン」と呼ぶようになっていた。

その中でクラヤミの家は、数少ない例外のひとつだった。彼の家は背の高い建物で取り囲まれていたので、サーチライトの照射範囲外だったのだ。さらにクラヤミが家の照明の類をすべて取り外してしまったので、彼の家は常に真っ暗だった。

例の「照明法」とやらを破って、彼は罰せられないのか、と疑問に思う人もいるかもしれな

い。その点に関しては安心してほしい。この町の住人は基本的に事なかれ主義なのだ。何かあっても、見て見ぬフリをするのが一番賢いやり方だと誰もが心得ている。『照明法』や他に幾つかある法律だって、自分たちに大義があることを主張するために存在するのであって、目に付かない所で反故にされる程度なら黙認するのが基本方針だ。

無駄に首を突っ込んで、自身の寿命を削る羽目に陥るのは、彼らが最も恐れるところだった。それに付け加え、クラヤミは日頃から誰もしたがない面倒な仕事を率先して受け持ってくれるので、彼に対して強く出られる者はいなかった。



その日、クラヤミは午前中に施設整備の仕事を片付けた後、昼間にアメリカン・クラブハウサンドを四切れ胃袋に詰め込み、書店でサリンジャーのペーパーバックを一冊購入した。

街角にある小さな煙草屋で銀貨とハイライトのパッケージとを引き換え、帰路に着く。

無人の道路を、クラヤミは口笛を吹きながら歩いた。この町の住民は用がなければ誰も彼もが家に引きこもって外に出てこない。大通りのど真ん中を歩いても、それを嗜める者は誰もいない。隘路を通っても、誰かと鉢合わせて困ることもない。

気楽でいいじゃないか、という人もいるかもしれない。けれどクラヤミに言わせてみれば、

これほど寂しいことは他になかった。世界に一人だけ取り残されたような、そういう類の寂寥感に襲われるのだ。

家に帰り着いたクラヤミは、まず違和感を覚える。扉の立てつけが悪くて開きっぱなしだとか、窓ガラスの破片が玄関に散らばっているとか、そういうことじゃない。それはいつものことだ。普段と違うのは、人の気配がするというその一点だった。彼は二十六年間、ずっと一人暮らしなのに。

クラヤミは目を凝らしながら家の中を見て回った。すると、リビングの隅に女の子が体育座りしているのが見えた。強盗とか町のお偉いさんでなくてよかった、とクラヤミは胸を撫で下ろした。

それから彼は戸棚を漁った。確か、取り外した電球をこの辺に仕舞っておいたはずだ、と考
えながら。

数分後、部屋に明かりが灯った。この家に光があふれたのは、じつに十数年ぶりのことだ。クラヤミは改めて少女を観察した。少女はクラヤミの存在にも、光にもほとんど反応を示さなかつた。ただ少しだけ、煩わしそうに顔をしかめただけだ。

小柄な女の子だった。身長もそうだが、この町で見る誰よりも痩せているから余計そう見えるのかもしれない。そしてぼろ切れのようなものを服として身に纏っていた。ショートボブの髪はラピスラズリのように透き通った藍色だ。

しかしそのどれよりもクラヤミの目を引いたのは、虚空しか映せないような曇った瞳だった。「わたし、いつだって自殺できますよ。やり残したことも、未練も何もないので」とでも言いたげな、すべてを諦めきったような目。

この子は果たしてどこから来たのだろうか、とクラヤミは思った。この町に、子どもはいないのに。

「おい、ここで一体何をしているんだ？」

クラヤミが問い掛けると、少女は気怠そうに顔を上げて彼を見つめた。睨んだ、と言ったほうが正しいかもしれない。

こんな廃墟みたいな場所で見知らぬ人に話しかけられて、よく怯えたり怯んだりしないな、とクラヤミはちよっぴり感心した。

「野宿ですが」しばらくして、透き通った声が返ってきた。

クラヤミは「そうか……」と呟いて、深くため息を吐いた。彼の家には明かりがなかったし、物が散乱していて情緒がない。扉は立てつけが悪くて開きっぱなしだし、空き家か何かだと思われても仕方ないよなあ、とクラヤミは思った。

「なあ」と彼は言う。

「信じられないかもしれないが、ここは俺の家なんだよ」

少女は身じろぎひとつしなかった。

「信じられませんね。だって、あなたみたいな方を世間は『ホームレス』と呼ぶんですよ」
要するに、「どうせお前もこの空き家を勝手に使っている浮浪者なのだろう？」と言いたいわけだ。

その後数十分に渡り、二人は埒の開かない押し問答を繰り返した。しかし、幾らクラヤミが説得しても少女は頑なに動こうとしない。そればかりか、電球を指さして、「それ、早く消してください。眩しいです」とクラヤミに命令した。

言い争いはそれからも続き、最終的に二人とも疲れて何も喋らなくなった。

長時間喋ったせいかわ、クラヤミは喉の渇きを感じた。彼がキッチンでコーヒを二杯入れてリビングに戻ってくると、少女は体育座りのまま寝息を立てていた。なぜか、両手で頭を抱えた状態で。

居座る気満々とは図々しいやつだ、とクラヤミは思ったが、それでも少女を『議会』に突き出したらしよとは思わなかった。彼女に身寄りがないことは何となく察することができたし、暗いところが好きな人間に初めて出会えたのが少しだけ嬉しかったというのものもある。

それにクラヤミだって、『照明法』を守っていないという『後ろ暗い』ことがある。下手にいざこざを起こして、とぼちちりを食らうのは勘弁だった。

刹那主義者で余命幾ばくもない二十代後半の男と、「おやすみなさい」と言いながら眠るように自殺しそうな十代半ばの少女。

かくして、二人の奇妙な共同生活が始まった。



クラヤミが行動派な人間だということを差し引いても、少女はひどく物静かで内向的だった。朝から晩まで、リビングの隅っこ——戸棚と壁の僅かな隙間——にひっそりと体育座りしているのだ。そして絶えず虚空を見つめていた。とても人間には見えないな、とクラヤミは思った。まるで機械みたいだ。

クラヤミが見る限り、少女は一度もその定位置から動いたことはなかった。食事や生理現象など、避けようのないことはどうしているのだろうと思ったが、どうやらクラヤミが出掛けたり、眠ったり、別の部屋に行っている間に済ませているらしい。人間らしい部分を隠そうとする、そういうところだけはやけに人間的だった。

食事に関しては、冷蔵庫に保管されている腐りかけの食品をつまみ食いしているようだった。このままだと、いずれ食中毒になるのは明白だ。世話を焼く義理などないと分かっていたが、その日からクラヤミは少女の分の食料まで買ってくるようになった。

少女はリビングのテーブルの上に置かれた、一人分にしてはやけに多い食べ物の山を見て、「わたしは何も欲しがっていませんから」みたいなふうには、わざとらしく顔を背けた。だから

クラヤミも、

「ああしまった、買い過ぎちまったな。もうこれ以上は食えない。どこかの誰かが処分しておいてくれると助かるんだが」とこれまたわざとらしく独りごちた。

そんな生活を続けていくうちに、少女の態度は徐々に軟化していった。睨みつけるような目つきはただの眠たそうな目に変わり、挨拶をすると会釈を返すようになった。少女の分の食料も一緒に買ってくると、それが何なのかこっそり覗き見るようになった。

一月を共に過ごして、少女は察したのだろう。ここは空き家などではなく、本当にクラヤミの家なのだということ。そして、それでも自分が追い出されることなく、存在を許されているということ。

「わたし、暗闇が好きなんです」

ある時、静寂と暗がりの中、少女の透き通ったような声がよく響いた。

クラヤミは一瞬固まったが、すぐに自分のことではないと気がついて、安心したような残念なような、複雑な気分になった。そもそも少女はクラヤミの名前を知らないし、クラヤミも少女の名前を知らなかった。

「世界のすべてを平等に塗り潰してくれるところとか、わたしの良くない部分を隠してくれるところとか。そういう究極的な『無関心さ』って、却ってとても優しいんです」

少女は珍しく饒舌に語る。

「そうか」

クラヤミは素っ気なく相槌を打ったが、内心では彼女に同意していた。彼だって暗闇が好きでなければ、こんな日陰に住み着いたりはしない。

「でも、暗闇は良いところばかりじゃない。だからずっと暗闇の中に籠っているのは感心しないな」

「悪いところって、たとえば？」

少女は怪訝そうな口調でそう訊いた。

「暗闇は、キミの良いところも隠してしまう」

クラヤミがそう言うのと、少女は世にも下らないとでも言いたげな表情をした。

「わたしに良いところなんて、これっぽっちもありません」

「そんなことはないさ。たとえば、初めて会ったあの時、明かりの下で見たキミの髪の色はとても綺麗だと思ったよ。あの藍色は、とても好きだな」

「そんなこと、ありませんよ」

そう言いながらも、彼女は少しだけ照れているようだった。

クラヤミはハイライトのパッケージから煙草を一本引き抜いて口に咥えた。ライターのフリントを擦って火を点ける。夜空に浮かぶ宵の明星のように、火は闇黒の中に浮かんだ。

「わたし、煙草はあまり好きじゃないです」

「そうか」

クラヤミは気にせず煙草を吸い続けた。部屋中に煙が充満し始める。少女は「まったくもう」と言った。

「煙草は嫌いですが、煙草の煙だけは、どうしても好きなんです。もくもくと立ち込めるこの感じが」

そう言って少女は、辺りに漂う煙を手のひらで掴もうと躍起になる。

暗闇に慣れたクラヤミの目には、幼子のように両手を振り回す少女の姿が映る。それを見てクラヤミは、「変なやつだな」とふっと笑った。



クラヤミのもとに少女が現れたことは、何かの前触れだったのだろうか。平穏だった「ライトタウン」に幾つかの事件が起きた。

町の一角、今はもうほとんど人のいない区画から、不意に光が消えた。蝋燭の火が吹き消されるように、一瞬にしてその地区のライトがダウンしたのだ。それ以降、時々、その区画から子どもの死体が発見されるようになる。どの遺体にも、激しい損傷の痕があった。

どうしてあの一帯から光が消えたのか？ 子どもたちはどこからやって来た？ 誰が子ども

狩りをおこなっているのか？

疑問は憶測を呼び、憶測はやがてある一つの噂を撒いた。

「あの区画には光を厭う魔物が住み着いた。魔物は外の世界から子どもを攫っては、魂を抜き取るのだ。我々の町は光に守られているが、隙を見せれば光は闇に塗り替えられてしまう」

町の人々は見えない恐怖に怯え、以前にも増して家に引きこもるようになった。この事態にも、町を統治する議会は沈黙を貫いた。

混乱が広がるこの町で以前のまま生活していたのは、クラヤミと少女くらいだった。しかしその二人の関係もまた、緩やかな変化を迎えようとしていた。

「なあ」

暫らく経ったある日、クラヤミは少女に語り掛けた。

「俺たちはそろそろ、自己紹介をするべきだと思うんだが」

二人は未だに互いの名前すら知らなかった。

「必要性を感じません」

少女はにべもなかったが、クラヤミは諦めなかった。彼とて、恒常的に会話ができる人を欲していたのだ。この町の人間は寡黙とまではいかないものの、積極的に喋ろうとはしなかった。

この町の住民は皆、「会話」がもつとも効果的に寿命を消費する行為であることを心得ていたからだ。

少女もあまり口を開きたがらなかったが、それはきつと寿命とは別の理由があるのだろう、とクラヤミは考えていた。たとえば、人見知りとか。

「そんなことはないさ。俺たちみたいない日陰者……ライトアップされない『ライトダウン』はこの町じゃ珍しいんだ。はぐれ者同士、仲良くやろうじゃないか」

少女は観念したようにため息を吐いた。

「言いたいことはよく分かりました。しかし残念なことに、ないんですよ」

「ないって、何が？」

「名前が、です」

少女の言葉に、クラヤミは暫し困惑した。彼にとつて名前とは、生まれたその瞬間に付随してくるものである。本と同じように、身体と同じように、それは初めからそこに在るべきなのだ。

事実、クラヤミは生を授かったその瞬間に、自分は「クラヤミ」であると自覚していた。

「もしかして、忘れてしまったのか？」

「いいえ、元からありません」

少女は苛ただしげに言った。クラヤミはますます当惑した。

「じゃあ、皆からはなんて呼ばれていたんだ？」

「そんなこと、言いたくありません」

刺々しく呟くと、少女はすつくと立ち上がった。

クラヤミの目の前で少女が腰を上げたのは初めてのことだったので、クラヤミは面食らった。戸惑うクラヤミの横を、少女はつかつかと通り抜けていく。そこでクラヤミは気が付いた。少女が座っていた場所には何も置かれていなかったし、歩き去る少女の手も空っぽなこと。今まで少女は一步もその場を動かなかったので気付けなかったが、彼女は文字どおり着の身のままだったのだ。

クラヤミは思わず、少女の後ろ姿に声を掛けた。

「なあ、自分の本はどうしたんだ？」

その言葉に、少女は足を止める。そして、ゆっくりと振り返った。

いつものように空虚な瞳でクラヤミを見据え、爪が食い込むほど拳を握りしめ、こう言った。

「わたしを、あなた方と同じにしないでください」

その後、少女はどうやらトイレに閉じ籠ったらしい。

本当に狭いところが好きだよな、とクラヤミは苦笑する。そして、何が少女の気に障ったのかを、また少女の言葉の意味を考えた。

煙草に火を点けて、思考を整理する。

あの少女は、この町の人間ではない。この町には大人しか住んで居らず、子どもは一人もない。彼女はどうかやってか、外界からこの町に迷い込んできたのだ。

そして、少女は本を持っていないし、名前もない。もしかすると、本を持っているのはこの島に住む人間だけで、外界には本という概念自体ないのかもしれない。向こうの世界では誰しもが名前を持っているわけではないのかもしれない。あるいは名前を訊くこと自体が無礼に値するのもかもしれない。

「……分らないよな」

煙を深く吐き出して、クラヤミは頭を掻いた。自分たちと違う常識の中で生きる相手と分かり合えるはずがない。

でも、分かり合えないことは、分かり合おうとする努力を放棄していい理由にはならない。分かり合えないのなら、譲り合えばいいのだから。

クラヤミが廊下を渡りトイレの扉の傍にいくと、少女が嗚咽する音が聞こえた。クラヤミが思った以上に、先ほどの会話は少女の心の傷を抉ったらしい。そして思った以上に少女の心は脆いようだ。

クラヤミはコーヒーを並々注いだカップをテーブルに二杯用意し、リビングで少女を待った。二十分後、リビングに戻ってきた少女の足取りは、心なしかふらついているように思えた。

「さつきは、悪かったな。コーヒーでも飲むといい」

席に着いたクラヤミは、少女に席に座るように促す。少女は躊躇したが、やがてしたり顔で席に着いた。

少女は目の前に置いてあるカップをじーっと眺めた。それから、両手でカップを握ってコーヒーをくゆらせた。濃褐色の液体が揺れて、濃厚な香りが辺りを漂う。

少女は恐る恐るカップの縁に薄い唇を付けて、一口飲んだ。それからすぐに咽こんだ。数秒後、少女は目じりに涙を浮かべながらクラヤミを睨んだ。

「何ですか、これは。放射性汚染水や治験薬でもまだマシな味がします」

少女の大仰な物言いにクラヤミは苦笑した。

「コーヒーだが、口に合わなかったか？」

「こんな不味いもの、口に合う人間なんていません」

「……俺は人間じゃなかったのか」

「もしかしたら、そうなのかもしれないですね」

少女はつつけんどんに言った。

少し待っていてくれ。あからさまに不機嫌になった少女にクラヤミはそう告げて、急いで冷蔵庫の中身を漁った。

やってしまった。クラヤミは心の中で後悔した。自分がコーヒー好きだからといって、相手もそうとは限らない。さつき、それを反省したばかりだったじゃないか。

そういえば、女の子は甘いものが好きと耳にしたことがある。コーヒーが駄目でも、甘めのコーヒー牛乳なら口に合うかもしれない。

「……今度はなんですか？」

数分後、目の前に新しく置かれたカップを見て、少女は警戒したような口調で言った。

クラヤミは向かいの席に座りながら説明する。

「コーヒー牛乳だ。コーヒーに牛乳と砂糖を少量加えただけのものだが、今度は放射性汚染水よりはマシな味になったはずだから」

少女は「信じられませんか」という顔でクラヤミを一瞥したが、しつこく勧められて、やがて観念したように一口分を啜った。

「どうだ？」

クラヤミは向かいの席から身を乗り出して訊く。カップから口を離れた少女はまったくの無表情だったので、クラヤミは「やっぱり駄目だったか」と落胆する。そんなクラヤミの落ち込みを他所に、少女はぼつりと呟いた。

「悪くないですね。というより、好みの味かもしれません」

その言葉に、クラヤミは目を見開く。それからほっと胸を撫で下ろした。

「……そうか、それはよかった」

相も変わらず少女は無表情だったが、それはもしかすると、照れ隠しの一種なのかもしれない、とクラヤミは思った。

その後、少女はコーヒー牛乳を三杯もおかわりした。

「放射性汚染水よりも美味しいだろう？」

とクラヤミが問うと、少女は「放射性汚染水とは比べものになりません」と言って満足げに喉を鳴らした。

「さっきの話だけどさ」

クラヤミは唐突に話を切り出した。少女の機嫌が良いうちに話してしまおうと思ったのだ。

「名前なんて、然して重要じゃないんだ。便宜だから付けるだけで、名前自体がその人になるわけでもないしな。だから俺はお前を好きなように呼ぶことにするよ。……そうだな、その髪の毛の色から取って、『アイロ』と呼ぼう」

クラヤミの言葉に少女は少しだけ嘖然としていたが、それから呆れたようにため息を吐いた。

「人の名前を勝手に決めるなんて、とんだ身勝手さんですね」

「身勝手さんじゃない。俺には『クラヤミ』という名前がある」

「それじゃあ、身勝手なクラヤミさんですね」

それからアイロはくすりと笑った。

アイロが初めて見せた笑顔らしい笑顔が、それだった。くたびれていて、目は泣き腫らして、おまけに涙の痕が頬に残っていたが、それでもクラヤミはその笑顔を綺麗だと思った。

「身勝手なクラヤミさん。おかわりをください」

アイロはどこか愉快そうに空になったカップを差し出した。

「身勝手でも何でもいいさ」

俺の身勝手なんかで笑ってくれるのなら、とクラヤミは笑った。



それから二人は一年近くも同じ屋根の下で過ごして、ようやく一緒に暮らすことを決めた。同じ家で暮らす他人から、形ばかりとはいえ家族になるのだ。

その上で決めなければならないことが幾つかあった。まず矛先に上がったのが部屋割りについてだった。

「空き部屋なら幾つかある。俺としては、どの部屋も自由に使ってくれて構わないのだが。眠るにも、ここじゃ不便だろう？」

前日の夜もアイイロはリビングの隙間で体育座りのまま頭を抱えて眠ろうとしていた。

それではあまりに不憫だろう、とクラヤミは思ったのだ。しかしアイイロは申し出をきっぱりと拒否した。

「部屋は要りません。ここが一番落ち着くので」

そう言って、アイイロはいつもの隙間に収まった。

クラヤミは「そう言うだろうと思ひ做していたよ」と苦笑して、言葉が続けた。

「もしよければなんだが、一つ訊いてもいいだろうか？」

「質問の内容にも依りますが」

「前々から気になっていたことなのだが、どうしてそんなところで眠るんだ？　こんな言い方をして悪いけど、そもそも、そんな場所が落ち着くということ自体、俺からすれば異常だ」

アイイロはしばらく熟考していたが、やがて観念したように視線を落とした。

「馬鹿みたいな、どうでもいい話ですが、それでもよければ」

「傍から見ればどうでもいい話でも、本人からすれば大事なことだったりするだろう」

「そうですね、わたしからすれば、切実な問題です。……眠るのが怖いんです。寝ている時って、何より無防備じゃないですか。自分を守る手段がないという状態が、不安で仕方がないんです。ここなら、三方向が遮られていますから、まだマシです」

アイイロの言葉に、クラヤミは頭を捻った。

「思い当たるのは睡眠障害だけど、多分それとは違うんだろうな。……キミが元いた場所は、眠ることさえ憚られるような、油断ならないところなのか？　ここ外の世界は、そんなに恐ろしいところなのか？」

この町に暮らす人間の中に、外の世界を知る者はいない。誰も島を取り囲む大海原と霧を超える手段を知らないし、この町で暮らしている間は生きるのに何不自由ないから島を出ようとも思わない。ただ一人クラヤミだけは、いつか外の世界を旅して回りたいと考えたことがあつ

た。

「外の世界はともかく、わたしがいた場所はあまり良い環境とはいえないところでした。そこにはわたしと同じくらいの子どもたちが大勢いて、だけど哀しみと苦痛だけが満ちている、そんな場所でした」

「その場所で、なにがあったんだ？」

「……わたしではなく、723番——ナツミという名前の女の子の話になりますが、それでもよければ。当たり前ですが、あまり気分の良い話ではありませんよ」

クラヤミは静かにうなずいた。

アイイロは膝に顔を埋めて語り出す。まるで、他人事のように、他人事にしたいように、努めて淡々とした口調で言葉は紡がれる。

「そこはとても広い施設でした。三十人ほどの白衣を着た大人たちと、百人近い子どもたちが暮らしていました。いえ、暮らしていたというのは語弊がありますね。暮らしていたのは大人たちだけで、ナツミを始めとする子どもたちは、いわゆる家畜のような扱いでした。彼らはナツミたちを「カーヴィア」と呼びました」

アイイロがさらに膝に顔を埋めたため、声は一段とくぐもった。聞き取りにくくなったが、クラヤミは一言も聞き漏らすまいと耳を傍立てた。

「ナツミは元々どこか遠くの町で生まれた孤児でした。バイヤーの間を転々とさせられ、最終

的にあの施設に辿り着きました。大人たちはそこで、何かの研究をしていたようです。施設でのナツミたちの役割は専ら実験台でした。大人たちは「平等」という言葉を好み、頻繁に口にしていましたが、どうやらその平等はナツミたちには適用されないうたひでした。彼らにとつて彼女たちは人間ではなかつたのでしようね。もつとも、子どもたちの方も彼らに対して同じように思っていました」

これが、どこか知らない世界の、知らない子の話だつたなら、クラヤミはきつと「ありきたりな悲劇だな」としか思えなかつただろう。だけどクラヤミはそうは思えない。アイイロの言うナツミがいったい誰なのか、何となく察することができていたから。

「それでも初めの頃はまだよかつた、と彼女は言いました。ナツミが施設に来たばかりの頃は、大人たちも研究に熱心でしたから。実験に痛みは伴いましたが、必要以上の苦痛は与えられませんでした。ですが、段々と状況が変わってきます。彼らの会話から断片的に聞き取つたことなので詳しくは分かりませんが、どうやら外部からの支援が滞り始めたらしいのです」

——同志はこのユートピアを見放した。いずれ、我々の理想は潰えることになるだろう。物資支援がなければ、俺たちも生きてはいけない。

大人たちがそう洩らしたのをナツミは耳にした。

「施設の大人たちは次第に研究をしなくなりしました。ナツミに分かつたことは、彼らの研究が無意味且つ無価値なものになつたということです。しかし、だからといって子どもたちが解放

されることはありませんでした。むしろ、志を失った大人たちは憂さ晴らしに子どもたちを使うようになったのです」

きつと、ナツミに起きたことはよくあることです、とアイイロは言った。暴力に曝されることも、傷つけられることも、妙な液体を飲ませられることも、よくあることです。

だから彼女の痛みも特別なものじゃなくて、ありきたりなものだったに違いありません。世界中のどこにでもあるような。

「やがて大人たちは、寝起きの瞬間が一番無防備で、効果的にいたぶれることを発見します。

それからは眠っている彼女の髪を引っ掴んで、即座に菓を飲ませるということが毎朝のように続きました」

少しの間、沈黙が訪れた。クラヤミは慰めの言葉を掛けるべきか暫し沈思したが、答えは出なかった。

これまで悠々と生きてきた俺が、いったい彼女に何を言えるだろう？

——今まで大変だったね。つらかっただろう。でももう安心していいよ。誰もキミを傷付けたりしないから。

そんな言葉、「安っぽいですね」と言われるのがオチだ。

だからクラヤミは、アイイロが吐いた、たった一つの嘘に乗っかることしかできなかった。

「それが原因で、そのナツミって子は、眠るのが怖くなったんだな？」

長らく沈黙していた彼の喉からは、低くしわがれたような声しか出なかった。

「……恐らくは、そうなのでしょう。そして、そんなゴミみたいな毎日が過ぎる中、日を追う毎に大人たちの数も、子どもたちの数も減っていきましました。いよいよ大人の数が七人にまで減ったとき、ナツミは施設を逃げ出す決心をします。警備の薄くなっていた施設からの脱出は容易でした」

「それで、逃げ出したその子はいったい、どうなったんだろう」

「さあ。多分親切な人に匿ってもらって、それなりに平穏な日々でも過ごしているんじゃないですかね」

「そうか、そりゃよかった」

馬鹿みたいな話だな、とクラヤミは思った。今の会話で救われたのは、俺のほうじゃないか。本当に、馬鹿馬鹿しい。

次の日、クラヤミは青色のナイトキャップを買ってきて、アイイロに手渡した。アイイロはそれを不思議そうに眺めて、手触りを確かめて、それからおもむろに頭に被せた。

「似合っているよ」とクラヤミが言うと、彼女は立ち上がって、姿見の前まで小走りして、「薄暗くてよく見えません」とはにかんだ。

「どうしてこれを頂けるんですか？」

アイイロが上目づかいにクラヤミの顔を覗き込むと、彼は咄嗟に目を背けてしまった。

「今日が、俺たちが出会ってちょうど一年になる記念日だからだ」

「わざわざ、覚えていてくれたんですね」とアイイロは言った。「それじゃあ、今日はわたしの誕生日だ」

「一歳の？」とクラヤミが冗談めかして訊くと、アイイロは「一歳の」と生真面目に繰り返した。

その日から、アイイロは寝室で眠るようになった。

彼女の寝顔をこっそり確認して、クラヤミはほっと胸を撫で下ろした。俺の寿命はもう長く残っちゃいないけど、この命が尽きる前に。

どうか彼女が、少しでも痛みを忘れられますように。



またある日、仕事のために家を出たクラヤミは珍しい光景に目を数回しばたかさせた。大通りに人が大勢いたのだ。人々は口々に何かを叫んでいたが、声が混じり合って、何を言っているのかはよく聞き取れなかった。

近場の煙草屋で、クラヤミはハイライトを買うついでに、店主を務める中年の男に尋ねた。

「今日はお祭りだったかな」

言いながら、銀貨を一枚差し出す。白髪が目立つ男はつまらなさそうに首を振った。

「残念ながら、そういうおめでたい類のものじゃない。どちらかといえば、あとの祭り、つてやつさ」

「なにかあったのか？」

「正確にはなくなつたんだ。どうやら、物資不足が深刻化しているらしい。今朝、議会から支給される物資が途絶えて、町中大騒ぎさ。日々の配給で細々と暮らしているやつらは、今日食うものもないらしい。そればかりじゃない。騒ぎに拍車を掛けるように南西区画のライトが一斉に切れた。この町はもう、お終いかもしれねえ」

「そいつは大変だな」

どこか他人事のようにそう言いながら、クラヤミはカウンター上に銀貨を滑らせ「ほら、いつものやつだ」とシガレット・パッケージを催促する。男は指先で銀貨を弾き返し、静かにため息を吐いた。

「悪いが、ハイライトはもう切れちまつたんだ」

その日も律儀に仕事を終えたクラヤミが帰宅すると、アイイロはリビングの隙間という定位に座って出迎えてくれた。

「ただいま」とクラヤミが言うと、椅子に座ったアイイロが小さな声で「お帰りなさい」と言った。クラヤミはそれがなんだか嬉しく思えた。

「これからは食料の調達が難しくなるかもしれない」

クラヤミはアイイロの向かいの椅子に座って、買って来た昼食を広げながら、「ライトタウン」で起きていることについて、アイイロに説明をした。

すべて話し終わったあと、アイイロは特に驚くでもなく、ただ頷いた。

「ごめんなさい。わたしは、そうなることを知っていました。この町は自給自足で成り立っているわけではありません。外部からの支援ありきです。そして、その支援はもう断ち切られて久しいのです。そろそろ物資の備蓄も尽きる頃でしょう」

彼女の言葉に、クラヤミはそうだろうな、と思う。

アイイロが逃げ出してきた施設が、この町を管理している「議会」のことだろう、ということには薄々気が付いていた。

そもそもにしてこの町は単独でやっていけるほど生産力があるわけではない。住民が働かざるを得ないとは言わずもがな、工場や畑すら僅かしかない。

「このままだと、寿命が来る前に皆死ぬだろうな」

クラヤミはぼつりと呟いた。

この町の住民が必死に守ってきた寿命。ページが尽きる前に、野垂れ死んでしまうとは、誰

が想像しただろうか。

彼らは現状を解決するために自給自足の生活をしようとは決して思わないだろう。そんなことをしたら、ページの消費を早めてしまうからだ。その思考が矛盾であることに、きっと彼らは気付けない。この町に毒され過ぎてしまったのだ。

「わたしは、死んでもいいですよ」

サンドウィッチを頬張りながら、アイイロは何でもないようにそう述べた。「クラヤミさんと一緒なら、それで」

「駄目だ」クラヤミはぴしやりと言った。

「この町がどうなろうと、キミとは関係ないだろう。俺は、アイイロには生きていて欲しいんだ」

それを聞いてアイイロは僅かに頬を膨らませた。

「わたしにそう言うのは勝手ですが、それならクラヤミさんはちゃんと、わたしの隣で生きてくれるんですよね？」

「それは……」

言い淀むクラヤミに、アイイロは手を伸ばす。

「クラヤミさん。あなたの寿命を見せてください」

暗闇の中、開かれた本を覗き込んだアイイロは眩しそうに手を翳し、目を細めた。普通の紙

媒体の本とは違い、彼の本は薄いディスプレイが一枚あるだけだった。豪華な革表紙は、この画面を守るためにあるのだろう。ディスプレイには彼女の知らない文字がずらりと規則的に並んでいる。

「わたしが知っている本とはだいぶ異なりますね……。クラヤミさんはこれ、読めるんですか？」
クラヤミは頭を振った。

「いいや、無理だな。何らかの法則性があることくらいは分かるんだが」
今も絶えず増え続ける文字列を、クラヤミは忌々しそうに目で追った。

「じゃあ、残りの寿命は、どこで分かるんですか？」
「ここに、ページ数を書いてあるだろう？」

アイイロの横から画面を覗いたクラヤミは顔を顰める。以前確認した時より、数値はだいぶ増えていた。

「しばらく確認しない間に、だいぶ消費したみたいだな」と彼はさらりと嘘を吐く。本当は、毎日確認を怠らなかつた。残りのページはもうほとんどない。あと一カ月生きられるかどうかだ。アイイロはゆっくりと本を閉じた。

「きつと、わたしのせいです。この町の他の住民と違い、わたしは本を持っていません。なので、本来二冊の本に二分されるはずの情報がすべて、その本に記入されるでしょう。クラヤミさんはわたしという間、寿命を倍も消費することになります。クラヤミさんにとって、それ

は不都合ですよね」

アイイロは寂しげに笑って、俯いた。対照的にクラヤミは、明るく笑う。

「確かに、寿命が実質半分になるのは俺にとつて不都合だ。俺は死にたいわけじゃないからな。でも今は、アイイロと一緒にいること以外に寿命を使うつもりはないから、これからも一緒にいることに変わりはないと思う」

それを聞いたアイイロは口を半開きにして、しばらく固まってしまった。クラヤミと目が合つて、急いで目を逸らして、またちらりとクラヤミを盗み見ては目が合つて、というのを三回繰り返した後、拗ねたように「言つてて恥ずかしくならないんですか」と口を尖らせた。

でもそれは照れ隠しで、本心では嬉しいと感じてくれたら、どんなに嬉しいだろうとクラヤミは思う。

クラヤミは「べつにならないよ」と言つて笑つて、それから彼女の手を取つた。

驚きのあまり肩が跳ねたアイイロに、クラヤミは一つの提案をする。

「なあ、これから少し町を歩かないか？」

「……無闇に明るい町ですよ、ここは」

表通りに出た途端、弾ける明かり。ここを歩くたびにスポットライトに照らされたような気分させられる。周囲を警戒するように、アイイロはクラヤミの服の裾を掴んだ。

「そうだろう」クラヤミは大真面目にうなずいた。「ライトタウンだからな」

二人はゆったりとした足取りで町を歩いた。コンクリートばかりの味気ない景色だったが、今日に限ってはクラヤミの目にはそれらが素晴らしいもののように映った。誰かと一緒に散歩をすることが、こんなにも楽しいことだなんて、知らなかった。

しばらく歩いていると、二人に周囲の視線が突き刺さった。

——おい、見ろよ。あの死に急ぎ野郎のクラヤミがツレを連れてくるぞ。しかも、見たこともない女の子だ。なんで、子どもがこの町にいるんだ？ ……恐らくこんな感じだろう、とクラヤミは苦笑した。

町の住人からじろじろ見られていることに、アイイロも気が付いたのだろう。見せ付けるようにクラヤミとの距離を詰め、寄り添った。

「もしかして、クラヤミさんの横を歩いているわたしに嫉妬しているんですかね」

得意げに言うアイイロに、クラヤミはこう言い返す。

「違うな。アイイロと一緒に歩いている俺を羨んでいるのさ」

「一見自慢合戦しているように見えて、その実褒め合っていますよね、これ」

そう言うってアイイロはくすくす笑った。「クラヤミさんは、有名人さんですね」

クラヤミはふんと鼻を鳴らした。

「悪い意味でな。あいつらはどうやら、寿命を気にせず動き回る俺のことを嫌っているらしい」

「わたしが思うに」

アイイロはそう前置きをして言った。

「人というのは、自分が成れなかったものを嫌うんです。そうなる価値なんて最初からなかったんだと自分に言い聞かせるように」

「……何となくだけど、分かる気がする」

クラヤミはさり気なくアイイロの手を握った。

「仮にお前の横を歩いているのが俺じゃなくて別の誰かだったとしたら、きっと俺はそいつのことを碌でもない嫌なやつだと思うだろう」

「残念ながら」アイイロはそつと彼の手を握り返す。その瞬間、二人は手を繋いで歩いていることになった。「わたしの隣を歩いている方は、世界一素敵な人です」

「なあ、俺が言うのも何なのだが」クラヤミはアイイロの横顔をちらりと盗み見た。「言ってる恥ずかしくなったりしないのか？」

アイイロは少しだけ頬を桜色に染めていたが、どうやら吹っ切れたらしい。開き直ったような口調で言う。

「人間なんて思っている以上に愚かで浅慮な生き物なんですよ。どうしようもないならどうしようもないなりに素直になったほうがいいでしょう？ どうせ、このライトタウンでは、すべてが白日の下に晒されてしまうのですから」

それもそうか、とクラヤミは思った。隠す必要なんてないじゃないか。べつに、疚しいことでもないのだから。



町は緩やかに破滅へと向かっていく。外堀から埋められていくように、町外れから順々に明かりは消失していった。加速度的にあらゆる物資が不足した。

町民たちは堰を切ったように議会へ押し寄せたが、そこは既にもぬけの殻で、数人の大人の死体が転がっているだけだったという。

数日経って、クラヤミはどうとう、その日の食料の確保すら困難になった。働き者の彼は金なら幾らでもある。だが、物がなければ通貨は意味を為さない。

「逃げよう」とクラヤミは言った。「島の外に」

「賛成です」アイイロは頷く。「でも、どうやって？」

「外部からの物資支援があったということは、やっぱり交通手段はあるはずなんだ。それに、この町を管理していた連中が、緊急の脱出手段を用意していないはずがない。それを探そう」

二人は夜になるまで待つて、それから家を出た。町を出ることは禁忌だったので、なるべく人目に付かない時間帯が望ましかったのだ。

去り際、アイイロは廢墟のようなその家に向けてお辞儀をして、それから小さく手を振った。

「さようなら」

二人は人のいない大通りを駆けた。これまで町を照らし続けた亭々たるスポットライトは、半分ほどが死んだように沈黙していた。

静謐な夜の下、二人の靴がコンクリートの地面を叩く音だけが辺りに木霊する。不意に、二人のすぐ傍にあったスポットライトの光が、深い海の底に沈むようにフェードアウトしていった。

どうやら「ライトタウン」の電力は、限界を迎えつつあるようだ。ぽつりぽつりと、町の照明は一つまた一つ失われていく。明かりが一つ潰えるたびに、辺りに夜が滲んだ。

「夜に染まった町というのは、存外悪くないですね」

走りながらも、アイイロは両手を広げてくるりと一回転した。

その刹那だった。まるで最後の抵抗をするかのように、町全体のスポットライトが一斉に灯つて、何度か瞬いた。そして一斉に弾けた。永い間虐げられてきた鬱憤を晴らすように、いよいよ濃い暗闇が町を覆う。

アイイロとクラヤミは立ち止まって、その闇景に暫し魅入った。

「見てください、一面の暗闇ですよ。わたし、暗闇が好きなんです」

「空の藍色も、俺は好きだけどな」

ほんとうですか？　と言ってアイイロは空を見上げる。やがて、アイイロの曇った瞳にぼつりと、ハイライトのような光が宿った。

「あ……」

町からすべての灯りが消えると同時に、まるでその代わりを務めるかのように幾千の星々が空から町を照らし始めたのだ。

すべてを塗り尽してしまう無粋な町明かりと違い、星灯りは夜の暗晦を尊重するように控えめに光る。そして夜もまた、星の煌めきが地上に届くよう、深く染まる。それは恋人のように美しい営みだった。

「町の光は、こんなにも綺麗な空を隠していたんですね……」

町の照明を消すことで星空を取り戻す行為を「ライトダウン」と呼ぶことを、クラヤミもアイイロも知らない。知らないけれど、暗闇の中、藍色の空の下、二人は幸せそうに、晴れやかに笑い合う。

町を抜けて、丘を下り、砂浜に出ると、一隻の手漕ぎボートが廃景に溶けて佇んでいた。まるで物語を結末へ向けて導くように、都合よく、それはそこにあった。

二人は顔を見合わせて、それから黙ってボートに乗り込んだ。

空の星と、水面の星。

空の星は動かないけれど、水面の星は揺れ動く。

二人は背中合わせにボートを漕いだ。海の真ん中、辺りに何かある気配はない。深い霧と靄が視界を尽く遮っていた。

「多分なんだけど」とクラヤミは前置きを言う。

「俺はもう、生きて地面を踏むことはないと思う。俺はあの町を離れていい人間じゃない。あの町を、そして島を離れた途端、寿命の消費が一段と早くなった」

残り少ない命が、惜しみなく燃え続けるのを感じ取っていた。

でも後悔はしていないよ、とクラヤミは言う。

「クラヤミさんは、死ぬことが怖くないんですか？」

震える声で、アイイロはそう訊いた。

「怖いに決まっている。決まっているからこそ、生きながら死んでしまうことは避けなくちゃならないと思う」

だからクラヤミは、最後の一瞬までアイイロの傍に居られて、幸せだった。

「そんな前向きに生を肯定できるクラヤミさんを、わたしは羨ましく思います」

アイイロは指先を水面に滑らせた。

「わたしが施設にいた頃、死ぬという選択肢は常に片隅にありました。ではなぜ死ななかつたのかと問われれば、きっかけが欲しかったんです。いよいよ死んでしまおうと思えるような、ひどいきっかけを」

ちよつとやそつとの絶望じゃ死ぬ勇氣も湧かない腰抜けなんです、わたし。後ろ向きでしよう？ アイイロはそう言つて自虐氣味に笑つた。

でも、それで良かったんだよ、とクラヤミは言う。

「キミが腰抜けじゃなかったら、俺たちは巡り合うこともなかった」

「じゃあ、わたしの腰抜けに感謝ですね」

さり気なく目じりを拭つてから、アイイロはくすくす笑つた。波は、穏やかにさざめいていた。

「なあ、アイイロは、どうして人間の寿命はどんな生き方をしても平等に減つていくんだと思う？」

「さあ。わたしには、分かりません」

「そうでもしないと、誰も動けなくなるからだ。何かを成そうとすればするほど寿命が縮んでいくなんてバカげた仕組みがあつたら、人々は死なないために生を放棄してしまうだろう」

そう、あの町の人間のように。

「それとも一つ。どうして人間の寿命はバラバラなんだと思う？」

アイイロは今度も首を横に振つた。

「いつ死ぬか誰にも分からないから、明日死ぬかもしれないから、こんなにも愛おしく一日一日を生きられるんだ」

その昔、"命の平等"という理想を目指して、ある島に集まった平等主義者たちがいた。彼らは法外の人体実験を繰り返して、ついに平等の寿命を持つ"生体ロボット"の開発に成功した。そして、偽りの理想郷を築いたのだ。

そのことを、少なくともアイイロは知っていた。

「たとえ俺がいなくとも、キミは強く生きられると思う」

「そんな寂しいこと、言わないでください」

「じゃあ、これからも一緒に生きていこう」

「そうですね。そうしましょう」そう言うてから、アイイロは両手で顔を覆った。「……出来もしないことだつて、言わないでください」

「悪かった」クラヤミはそう呟いて、目を伏せた。

「俺はもう死んでしまうけど、アイイロにはこの先も生き続けて欲しいんだ」

「あなたはわたしを一人だけ置いて、一人で先に死んでしまうんですね。そしてわたしには、この残酷な世界で生き続けると、そう言うんですね？ ずるいですよ、とつても」

「俺もそう思う」

そう言うクラヤミの背中に、アイイロは抱きついた。背中に顔を埋めて、声を抑えて泣いた。「でも、そんな身勝手なクラヤミさんの最後の我儘、特別に聞いてあげます」

その声は涙に滲んでいたが、アイイロは努めて明るくそう言い切った。

「……安心したよ」

その瞬間、クラヤミの全身から力がふっと抜け、彼の身体は横倒れになった。ボートは大きく揺れる。どうやら、時間になってしまったらしい。

そんなクラヤミの顔をアイイロが覗き込んだ。最後にと何かを言いかけたクラヤミの口は、彼女の唇で塞がれる。

十数秒してアイイロは口を離し、透き通ったようなソプラノの声で囁いた。「大好きでした。おやすみなさい」

その声が、クラヤミの聴いた最後の音だった。

優しく臉が降りてきて、次いで急速に意識が落ちていく。果てのないような闇の底まで「ライトダウン」していく。

しまったな、とクラヤミは思う。最後に一番伝えたかったことが、言えずじまいになってしまった。でももう言葉は出ない。何も見えない。音も聞こえない。指先一つ動かすことも……。

——届け、最後の言葉。

強く願うと同時に、暗闇が彼の意識に覆い被さった。



ボートを降り、海岸線に降り立ったアイイロの目の前には、打ち捨てられたような掘立小屋が建っていた。

クラヤミの身体を十分かけて引っ張って、小屋の中に置いてあったベッドに横たわらせる。それから、彼が最後まで持っていた本を開いた。

ディスプレイに映るのは、何らかの法則性を持って並ぶ記号。やっぱり読めるわけがない、と本を閉じようとしたアイイロの目に、ある単語が焼き付いた。

アイイロは目を見開いて、それから暫く茫然としていた。次第に笑いが込み上げてくる。彼らしい伝え方だ。でも本当は、彼の口から直接聞きたかったなあ。

クラヤミさんにもう一度会いたいと、アイイロは心の中で強く願った。この時ばかりは、彼が人間じゃなくてよかった、と思った。

「クラヤミさん。わたしにも、生きる目的が見つかりましたよ」
そう独りごちて、アイイロは小屋の外に出た。

頭にナイトキャップを被り、その胸には一冊の「本」を抱いて、絹糸のように美しい藍色の髪をなびかせる少女は、行く手に広がる一切明かりのない森閑とした森林を一人きり、しんと見つめていた。